

政治と音楽



軽部 謙介

帝京大学 教授 (元 時事通信社 解説委員長)

「ウッドストック」と聞くと体の奥がうずくのは、「高齢者」と呼ばれる世代だろう。

何故このロックコンサートのことを知ったのか、はっきりとは覚えていない。大好きだったジャニス・ジョプリンの関連情報としてだったのか。記録映画の話断片的に聞いたからか。クラスには必ず1人か2人はいた物知りの友人が教えてくれたのか。

その後長じて2000年代後半、ニューヨークに駐在した。仕事漬けの日々を送っていたある日、ウッドストックに行ってみようと思いついた。あのコンサート会場は「ニューヨーク州のどこか」だったはずだ。ロック音楽の熱烈なファンというわけではないが、記念の博物館もあるというではないか。地図を開けばマンハッタンからそう遠くない。

この「世紀のロックフェスティバル」が、ウッドストックという街で開けなかったのは有名な話なのだが、このときなぜかそれは記憶の外。車を走らせて1時間ほどだったろうか、ウッドストックに着いたのはいいが、それらしき施設は全く見当たらない。

ドラッグストアに入って尋ねると、「またか」というようなうんざり顔で、「いいか、ここじゃないんだ。あれはベセルという街で開かれたんだ」。

そうだ。その話、聞いたことある。で、そこにはどうやってたどり着けるのか。

「インターステート87号に戻って、ニューヨーク方面に走れ。そのあとはうんぬんかんぬん」

1969年の夏、ウッドストックの住人は、ロックフェスティバル開催を拒んだ。主宰者たちは土壇場で会場を数十キロ離れたベセルに移す。しかし、結局このコンサートは「ウッドストック」として後世にレジスターされた。よく調べもせずに地名だけで訪ねてくる中高年が多いのだろう。だから町の人の説明も手慣れたものなのだと妙に納得する。

とんだ寄り道をしておかげで、「ウッドストックの会場となったベセル」に着いたのは陽が西に傾き始めた頃だ。米国ならどこにでもある静かな農村のたたずまいで、傾斜のある広大な芝生は当時のまま。博物館の

中はサイケデリックな装飾が施され、当時の映像が繰り返し流されていた。記録によれば、わが歌姫、ジャニスも2日目の夜に登場し、「ピース・オブ・マイ・ハート」を歌い上げている。

あの頃は音楽が燃えていた。

それ故か、60年代から70年代にかけて、米国の政治や戦争は音楽とかぶさって記憶されている。

たとえば、63年のマーチン・ルーサー・キング牧師による「私には夢がある」というあまりにも有名な演説を聞いていると、ジョーン・バエズの「We Shall Overcome」が思い出される。おそらく、のちに見たキング牧師の映像にバエズの歌がのせられており、それがワンセットになって甦るのだろう。

映画の影響が大きいのだが、ベトナム戦争の戦闘シーンは、ジミ・ヘンドリックスの「パープル・ヘイズ」やワグナーの「ワルキューレの騎行」、あるいはバーバーの「アダージョ」などが頭に響く。

あの頃、音楽は権力への抵抗手段でもあった。

たとえば、ニクソン大統領の映像を見ると、ついついクロスビー・スティルス・ナッシュ・アンド・ヤング、通称CSNYの「オハイオ」が思い出される。この曲はオハイオ州のケン州立大学で学生4人が州兵に射殺された事件を題材にし、「ニクソンがブリキの兵隊と一緒にやってくる」と歌っている。

また、70年に公開された映画「いちご白書」は、コロンビア大学の学園紛争がモデル。体育館に立てこもった学生たちが幾重にも輪を作り、ひざまずいて床をたたきジョン・レノンの「平和をわれらに」を合唱するラストシーンは記憶に刻まれる。「抵抗としての音楽」の象徴的シーンだろう。

しかし、個人的には何ととっても、ウッドストックのトリに登場したジミ・ヘンドリックスがエレキギターの特徴を最大限活かして弾いた「米国歌」が刺激的だった。今でもウッドストックを代表する1曲といえはこの演奏が思い浮かぶ。そしてこの曲は、世界中の若者を覚醒させた。そうか、国歌にも、その後ろに控える国家にも、お行儀よく従う必要なんてないんだ、と。

ワシントンを観察していると、国家の側のイベントである政治などもさまざまなメロディーに彩られていることに気づく。つまりこちらは「体制としての音楽」。

たとえば、式典で大統領が登場するときは、「ヘイル・トゥー・ザ・チーフ」の演奏が流れ「権威」を高めている。4年に一度の就任式前後に必ず開催されるのは音楽界や舞踏会だ。

ビヨンセの「口パク疑惑」が生まれたオバマ大統領2期目の就任式。彼女の国歌斉唱は、それが生歌であろうがなかろうが、大きな感激を聴衆に与えた。その4年前に初の就任式を控えたオバマのために彼女が歌った「アメリカ・ザ・ビューティフル」の独唱も心揺さぶられる仕掛けになっていた。

これらが、フォーマルな「愛国心の起動装置」であるならば、4年に一度の党大会では党派色の強いイベントが盛りだくさんだ。その傾向は民主党に強い。例えば、上院議員のジョン・ケリーが大統領選挙に立候補した2004年。ボストンで開かれた党大会最終日に登場したのはキャロル・キングだった。多くのヒット曲で親しまれている彼女が歌ったのは「君の友達」。「You've got a friend」と歌い上げる彼女のちょっとハスキーな声が魅力だったが、ここで歌ったのは「ケリーはみんなの友達」という替え歌だった。会場はかなり盛り上がったが、個人的には猛烈にいられた。

選挙総括にもロックが使われることがある。

この年の大統領選挙本番で、ケリーは現職のブッシュ（ジュニア）に敗れた。このときワシントン・ポスト紙の人気コラム「イン・ザ・ループ」は「民主党を元気づける歌」にザ・ドゥービー・ブラザーズの「ジーザス・イズ・ジャスト・オールライト」を選んだ。このグループは「リッスン・トゥー・ザ・ミュージック」など誰でも一度は聞いたことがあるヒット曲で知られる。70年代ロックの大御所という位置づけだ。「ジーザス」はノリのいいリズムとマイナーのメロディーで「至高の神は我とともにあり」というフレーズを繰り返す。この当時、イラク戦争の後始末に伴い米軍の被害が拡大し、経済でも雇用が減少するなど陰りがみられていただけに、この敗北は民主党に「なぜ勝てなかったのか」と反省を生んだ。

「ジーザス」を選んだ理由について、「ループ」欄はこう説明した。「民主党員は、党大会の会場で、手をつないで高く上げ、体を揺らしながらこのアップビートの曲を歌わなきゃね。それはメンフィスかな。それともノースカロライナ州ローリーか、はたまたセントルイスでのことになるのか」

信仰の深さを歌うこの曲に合わせ、民主党の若い支

持者たちが踊る姿は想像できない。またメンフィスやセントルイスというのは、共和党に差をつけられた南部諸州を意味する。つまり、民主党が勝つにはもっと政策のウィングを広げて、宗教右派や共和党に傾いた南部を取り込まないとだめだ、というのがこのコラムのメッセージだったのだ。

ちなみに、04年の民主党大会で「基調演説」を行ったのが、当時イリノイ州の上院議員だったバラク・オバマ。この演説は注目を集め、彼はこの年の連邦上院議員選挙に勝利。4年後には大統領へと駆け上がっていく。宗教右派や南部諸州の取り込みはあまり話題にならなかったが。

ホワイトハウス入りしたオバマは在任中、ブルース、ロック、カントリーなど多彩なジャンルの大物アーティストをホワイトハウスに招き何度もコンサートを開いている。大ヒット曲「プラウド・メアリー」に合わせてノリノリで体をゆする映像も視聴可能だ。

それにしても、音楽界の「大御所」たちはなぜ民主党支持ばかりなのだろう。

ワシントンでバーブラ・ストライサンドのコンサートに行った時のことだ。2階席の前の方に座っていたので、民主党の大物たちが何人か会場の最前列に座っているのがよく見えたし—コンサートの終了時か、幕間なのかはっきり記憶にないが—この大物たちがステージから身を乗り出した彼女と、何か話しているのが確認できた。どうやら彼らは顔見知りのようなのだ。

彼女だけではない。ブルース・スプリングスティーン、スティービー・ワンダーなどは、ほとんどが民主党支持で、選挙になればそれを隠さない。

もちろん、彼らの政治的選択は自由だ。おそらく今年の選挙でも「反トランプ」として多くのミュージシャンが「バイデン支持」を表明するだろう。

しかし、である。2010年、バエズはオバマの前でギターを片手に「We Shall Overcome」と歌った。獲得目標だった公民権法は成立し、ベトナムからも米軍は撤退した。時代を経て彼女には「何に勝利するのか」が不明確になってしまったのか。「抵抗の歌」をホワイトハウスに陣取る権力者の前で披露する—。気持ちのいい構図ではない。

民主党支持であろうがなかろうが、「体制としての音楽」に取り込まれるとき、どんなメッセージソングであってもその真実性は失われていく。

バエズはキング牧師の演説とダブって流れてくる60年代の歌声だけで十分だと思うし、ジミヘンが生きていたら大統領就任式であの「国歌」を演奏するだろうかなどと妄想する選挙間近の今日この頃なのである。 ●